

〔巻頭言〕

看護実践研究の発展

研究科長 服部 律子

本学研究科は、今年度で開設から12年を迎えた。本学研究科は、個人の尊厳と人権の尊重を基盤に据えた利用者中心のケアの在り方を追求し、広い視野から看護実践の改革を積極的に推進できる創造的で先駆的な指導者層の育成を目指している。大学院での教育と研究活動を通じて、看護現場の改善と改革に取り組み、看護の専門性を深め実践的な能力を身につけることが人材育成の目標である。修了者はすでに90名を超え、ほとんどが看護実践の場で、活躍を続けている。昨年度実施した修了生の調査においても博士前期課程の3年間は忙しくとも充実した学びの期間であったことが確認された。また多くの修了生が、大学院修了後も実践の場において、指導的な立場に立ち、研究的な視点をもって活動を続けている。

本学の研究科は、看護実践研究の推進という特徴的なカリキュラムを展開している。看護職は、常に実践の現場において、「より良い看護」を目指して日々努力しているが、実際にはそれぞれの経験や立場によって「より良い看護」の実現も難しく、改革の方向性も見いだせないことが多い。本学の博士前期課程では、混沌とした看護実践の現場において、看護の質向上のためにあらゆる角度から看護を見直し、利用者中心のケアの本質を探る学修を通じて、改善と改革を実践できる能力を育成している。看護の現場は複雑な事象にあふれ、問題の本質が掴みにくいのであるが、博士前期課程の1年次では、その状況をとらえ現状を分析することにより課題の明確化を図っていく。さらに利用者中心とは何かを看護を受ける対象の立場にたち、その人らしさの尊重と生命と生活を守る看護の本質から実践を振り返ることにより、高い倫理観に基づく自己の看護実践能力を高めていくことができる。そのような極めて実践的な学修を通じて、修士論文を作成するのであるが、その成果を公表することにより、看護実践研究の発展を目指していくことが、12年目を迎えた本学研究科の新たな課題である。

本学の紀要では、第13巻より修士論文の成果を公表してきている。修士論文は博士前期課程での研究活動の成果であるが、公表する研究論文として審査を受けているの

ではない。紀要編集委員会では、看護実践研究を研究論文として完成度を高めるため、査読を重ね十分な検討を行い、公表してきている。本号までの4年間に、大学院修了者が筆頭の論文として原著10編、研究報告6編、資料2編を掲載してきた。それぞれ専門分野も異なり特徴をもった論文であるが、看護実践を基盤とし、現状分析から課題を明確にすることは研究論文の基本的な構成となっている。看護実践研究はこの課題の明確化から実践の改善につなげていく創造的で革新的な取り組みであるが、実践現場での研究活動の展開には、実務者である学生と看護現場の看護職との力動的な関わりがあり、多様な過程が展開されていく。それは学生にとっては、今までにない学びの過程であり、学生の所属する看護の組織を活性化させることにつながっていく。

さらに看護実践研究としての特徴として、看護の改善・改革のための、その現場に有用な看護方法の開発が挙げられる。実践上の課題を解決するための方策は、そこで働く看護職が導き出せるものである。またその看護方法の開発については、その施設個別の課題を超え、普遍的な有用性も期待できるのである。それらの過程を科学論文として表すのは、一種の挑戦であるかもしれない。看護実践のダイナミックな過程と成果は、客観的に表現することは困難であるが、看護実践研究においては、その特質の表現を試みている。

看護の本質を常に問いながら、看護実践を基盤にした研究論文は、今後の看護に多くなる可能性をもたらすものであると考えている。本学紀要での看護実践研究の研究成果の積み重ねは、様々な領域で活動する看護職からの評価を得ながら、実践の知としてより洗練され将来の看護の発展に寄与するものであると信じている。